

いっていい位ないに等しい状態なのです。しかし、これからまだ日本史を学ば研究しようとする私達に、ここに研究発表をすることによって近い将来どの様にしてか役立つでしょう。又、それが何を私達に与えるかはまだ未知数としても、少なくとも今後この古文書講読会がより発展し、そして古文書を学ぼうとする学生が今以上に一層増加する事を望んでいる現在の私達です。

「國史纂集」の発刊にあたって

日本史研 後藤重巳

「國史纂集」と命名される日本史研究の研究機関誌が生ぶ声を上げると聞く。よろこばしい限りである。

夕分、昨年十二月二十日頃だったと記憶しているが、私は屋敷裏庭の六〇坪ばかりの畑に、大根・白菜・春菊を播種した。

播種の適期を若干逸してはいたのだが、種を播いてさえおけば、芽を出し、生育するものと信じていた。

夏時分と異なり、二・三日遅れはした

ものの、果せるかな一応芽を出した。しかし、生育状態はきわめて不良で、二ヶ月以上を経た今日でさえ、大根はオ三葉が心でとのでき始めた程度である。

伊勢暦や靖国暦には、農事暦として野菜の播種期を非常に巾狭い時期の間に限定している。

我々が、学問を始める時、そこには同様に当然適期が存在するものと考えられる。

俗に「四十の手習い」などという語があり、古人の中には、晩学の例をいくつか数える。

しかし、生育が良く、良質の大粒を得るためには、播種の適期を逸してはならない様に注意し、向もまた然りではあるまいか。

「國史纂集」の創刊が、こうした意味で、学問という大樹の植えつけの期にたとえらるべき研究発展の契機にならんことを期す。

発展のために余程の努力を望むものである。

